

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～11）に答えよ。（配点 50）

甲

甘えという、現在の語法から考えて、また発達の見地から考えても、母子関係における幼児の振舞いのことを当然思い浮べるが、不思議なことに日本語の代表的な辞書にはこのことがふれられていない。例えば大言海の「あまゆ」の項を見ると、「人の情あるにもたれる」とだけあり、そこにあげられているシユツテンの例文はいずれも成人についてのもので、幼児についてのものはない。このことはもしかすると、甘えを特に幼児的なものとするわれわれの意識が時代的に比較的新しいものであつて、過去においては全くそのことに注意が払われていなかったことを暗示しているのかもしれない。では甘えという言語を最初に使った日本人の意識の中でこの語がどのような連想を伴っていたかということをおぼろげに問わねばならぬが、この問題は結局甘えの語源に関するものとなる。そしてこの点に関する限り従来の成書には何等の記載も見つけることができないのである。

そこで私は以下にこの点について素人のダイタンな空想をのべてみよう。まず甘えの語幹であるアマは、日本人ならほとんどすべて最初に口にする乳児語ウマウマと関係があるのではなからうか。大言海にも、甘しは旨しに通ずるとということが書いてあるが、であるとするとなおさらアマが乳児語ウマウマのウマと関係があるとする私の空想がもつともらしく思われてくる。すなわちこの空想が正しいとすると、甘えのアマはもともと語源的に乳児期と関係があることになる。そうだとするとわれわれ近代人が甘えを特に乳児的現象と考えるようになったのは当然のキケツのように思われるが、しかし言葉を初めて造つた古代人にとって幼児と成人との区別といったような知的判断はムエンのものであつたであらう。彼らはむしろこの際アの方を重視したのではなからうか。ところでアマに盛られた感動が何であつたかということであるが、私はそれは乳を恋うことに示される憧憬であつたと答えるのが最も正しいのではないかと思つている。もつとも古代人にとってその憧憬は単に乳を恋う場合にだけ意識されるものではなかつたであらう。彼らは同じような憧憬をもつて彼らにイ接したのではなからうか。ここで私の空想はそれこそ天翔るのであるが、私は甘えのアマは天のアマ、枕詞ともなつたアマと同じではないかと思つてならない。そう思うのは、古代日本人にとって天は畏るべきもの、地から隔絶したものでなく、われわれにもつばら恵みをもたらすものであつたと考えられるからである。

最近、泉靖一・井上光貞・梅棹忠夫の三氏が「日本人と日本的思考」についての座談会で、日本人の天が遊牧的な「Iの天」に対して「IIの天」であるということを論じておられるが、これは私が今のべたこととうまく調和する。実際、「天降る」「天翔る」という現代でもヒンパンに使われる表現はすでに古事記・万葉集の中に現われている言葉である。大体、日本人の祖神とされた天照大神が大麥母性的な神である。このように見えてくると、甘えの語源と天照大神の神話は同じ根から出発していることになり、これが事実ならば大麥面白いと私はひとりほくそ笑んでいるのである。

甘えの心理的原型

Ⅱに見れば、甘えの心理的原型は母子関係における乳児の心理に存するということがあまりに明らかである。以下この点について若干考察を加えると、^A生れたての乳児については、甘えているといわないことにまず注意しよう。大ていは生後一年の後半に、乳児が漸く物心がつき、母親を求めるようになった時、はじめて「この子は甘えている」というのである。

すなわち甘えとは、乳児の精神がある程度発達して、母親が自分とは別の存在であることを知覚した後に、その母親を求めることを指していう言葉である。いいかえれば甘え始めるまでは、乳児の精神生活はいわば胎児の延長で、母子未分化の状態にあると考えなければならない。しかし精神の発達とともに次第に自分と母親が別々の存在であることを知覚し、しかもその別の存在である母親が **ウ** であることを感じて母親に密着することを求めることが甘えであるといえるのである。

ところでこの現象は洋の東西を問わず、原則としてすべての乳児に観察し得るはずのものである。なお人間の乳児に限らず、動物でも乳離れしない子は親につきまとうので、その意味で例えば「子犬が親犬に甘えている」といった表現を用いることも可能である。ただ人間の場合はこの種の行為の心理的内容が洞察され得ることは特徴的であるといわねばならぬが、殊に日本語で甘えという言葉が発明されたことは、この心理を大きくクローズ・アップすることに役立つといえるであろう。すなわちこの概念をバイカイとして母親は乳児の心理を理解し、それにこたえることができるので、母子ともに渾然とした一体感を楽しむことが可能となったのである。そればかりでなく、甘えという言葉を持たない民族に比較し甘えを自覚する日本人の場合は、この心理が人間の精神生活のあらゆる面に強い影響を与えることを許す結果となり、またそれに応じてこの心理のヴァリエーションを示す多くの語彙を持つことが必要になってきたものと思われる。かくして甘えの世界がゲンシェツするに至ったのである。

さて先に、甘えの原型は乳児がおぼろげに自分と別の存在であると知覚する母親と密着することを求めることであると述べたが、^Bであるとする、甘えるということは結局母子の分離の事実を心理的に否定しようとするものであるといえないだろうか。母子は生後は明らかに物理的にも心理的にも別の存在である。しかしそれにも拘らず甘えの心理は母子一体感を育成することに働く。この意味で甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとするのでありと定義することができるのである。したがって甘えの心理が優勢である場合は逆に、その蔭に分離についての葛藤と不安が隠されていると推理することも可能となるであろう。もちろんそうであるからといって、^C必ずしも甘えが常に非現実的かつ防衛的であるということにはならない。むしろ甘えなくしてはそもそも母子関係の成立が不可能であり、母子関係の成立なくしては幼児は成長することもできないであろう。さらに成人した後も、新たに人間関係が結ばれる際には少なくともその端緒において必ず甘えが発動しているといえる。その意味で甘えは人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割を果していることになる。分離の事実^Dに全く目を蓋うことが非現実的ならば、分離の事実^Eに圧倒されて人間関係の可能性に絶望して孤立することも同じく非現実的であるといわねばならないのである。

(土居 健郎「『甘え』の構造」)

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解管用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は 、 。

a シュツテン

b ダイタン

c キケツ

d ムエン

e ヒンパン

f バイカイ

g ゲンシュツ

問2 空欄 ・ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は ・ 。なお、完答しなければ加点しない。

① 降雨 ② 断絶 ③ 狩猟 ④ 母性 ⑤ 放浪

① 父性 ② 農耕 ③ 定住 ④ 連続 ⑤ 青空

問3 空欄 に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 歴史的 ② 構造的 ③ 近代的 ④ 神話的
 ⑤ 精神的 ⑥ 発達の ⑦ 心理的

問 4 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 乳児に引き起こされる現象
- ② 言葉に盛られた感動
- ③ 最初に口にされる乳児語
- ④ 旨しに通ずる語幹
- ⑤ 言葉に伴われた連想
- ⑥ 幼児の乳を恐る感情

問 5 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 畏れを与えるものに対しても
- ② 不安を与えるものに対しても
- ③ 感動を与えるすべてのものに
- ④ 恵みを与えるすべてのものに
- ⑤ 母子一体感を与えるものに
- ⑥ 分離の事実を否定しうるものに

問 6 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 渾然一体としたもの
- ② 葛藤や不安を全く感じさせないもの
- ③ 母性的人間的
- ④ まぎれもない一人の人間
- ⑤ 自分に欠くべからざるもの
- ⑥ 強い影響を与えるもの

問7 傍線部A「生れたての乳児については、甘えているといわない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **14**。

- ① 胎児の延長である乳児が、生れたての頃に母親に甘えるのは当然のことであるから。
- ② 生れたての乳児は、まだ母親に甘えることがどういうことか分かっていないから。
- ③ 生れたての乳児に対しては、母親の方が分離することを不安に思っているから。
- ④ 母子未分化な状態にある乳児は、母親を自分と別の存在としてとらえられないから。
- ⑤ 生まれた時から、母子は明らかに物理的にも心理的にも別の存在であるから。

問8 傍線部B「甘えるということは結局母子の分離の事実を心理的に否定しようとするものである」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **15**。

- ① 乳児が母親について、自分とは別の存在であると知覚するのは不安なことであるため、甘えることにより分離が事実上否定されて安心するから。
- ② 乳児は精神の発達とともに母親とは別の存在であることを知覚するが、分離することには痛みが伴うため、甘えることでその痛みを止揚して、母子一体感を得ようとするから。
- ③ 甘えることの蔭には、分離についての葛藤と不安が隠されているが、乳児はその葛藤や不安を心の中に閉じ込めることで、健康な精神生活を送ることができるから。
- ④ 人間存在には本来分離の事実がつきものであるにも拘らず、甘えることでは母子一体感が得られず、分離の事実に絶望してその痛みを止揚しようとするから。
- ⑤ 乳児は母親を自分とは別の存在だと知覚しつつ、自分に必要なものだと感じるため、甘えることで母親と分離している時間を少しでも少なくしようとするから。

問9 傍線部C「必ずしも甘えが常に非現実的かつ防衛的であるということにはならない」の理由として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **16**。

- ① 甘えは人間の健康な精神生活にとって、必要不可欠なものであるため。
- ② 甘えることで母子一体感が育成され、母子関係の成立が可能であるため。
- ③ 成人後に新たな人間関係が結ばれる時には、少なくともその始まりにおいて甘えが必ず生じているため。
- ④ 甘えは人間にとって必要なものであつて、甘えることによって新しい人間関係が結ばれることもあるから。
- ⑤ 甘えの心理の蔭に分離についての葛藤と不安が隠されているという推測は、分離の事実を全く無視したものであるから。

問10 空欄 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 甘えの語源的現象
- ② 発達の見地からみた甘え
- ③ 甘えの言語的起源
- ④ 日本的思考における甘え
- ⑤ 古代日本人にとっての甘え
- ⑥ 甘えの時代的現象

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。ただし、完答しなければ加算しない。解答は解答番号 の二ヶ所にマークすること。

- ① 人は、分離の事実によって人間関係の可能性に絶望し孤立しがちであるが、甘えることによって、成人でも母子一体感を得ることができる。
- ② 日本語には「甘え」という言葉があるが、「甘え」という言葉を持たない国では、こういった行為の心理的内容が洞察されることはなかったと考えられる。
- ③ 天が、われわれにもつばら恵みをもたらすものだというのは日本的思考であり、天照大神が母性的な神であることも、一つの根拠となる。
- ④ 甘えるという行為によって、母子の分離の事実は隠されてしまうが、甘えを自覚する日本人の場合、「甘え」という心理が精神生活に強い影響を与えることになった。
- ⑤ 甘えるということは、母子の分離の事実を心理的に否定するものであり、分離の事実を母子が認めないのは非現実的なことである。
- ⑥ 生まれたての乳児は、親につきまとうのが当たり前であるため、あえて「甘えている」とは言わないものである。
- ⑦ 言葉を初めて造った古代人にとっては、乳児が乳を恋うことと、成人が自らに恵みをもたらすものにあこがれることは、区別されていなかったと推測される。
- ⑧ 天は古代より日本人にとって畏るべきものであり、実際「天降る」「天翔る」という表現は、古事記・万葉集の中ですでに使用されている。

II 次の文章を読んで、後の問い（問1～12）に答えよ。（配点 50）

日本の人文社会科学系の学問は基本的に西洋から導入された輸入学問です。だからどうしてもアメリカ、ヨーロッパが「本場」であつて、日本の学者はそれを紹介したり、持ち込んだり、^A「本場」のふんどしで相撲をとらせてもらっているのです。哲学も政治学も経済学も社会学もおおよそそういう傾向を強くもっていました。これは西洋に追いつくことを目標と心得た近代日本の学問の宿命でした。

最初からこういうバイアスがかかっているのです。日本の人文社会科学は決して I の言葉で語り、I の議論をしてきたわけではないのです。常に権威は海外にあつたのです。その上で、欧米あたりの著名な学者を呼んできてシンポジウムをやつても、いややればやるほど、「われわれ」の I の思考が衰弱してゆき、ますます「本場」の主流になってしまうでしょう。多くの場合、単なる「権威づけ」に終わってしまうのです。しかもこの「権威」を得るために海外からの招待者には大枚が支払われる。このもつともらしい^aテイサイの背後にある「奴隷根性」というべきものこそが大きな問題なのではないでしょうか。

もちろん、人文社会科学においても、グローバルな共通語や共通の議論はありえます。しかし、討論者はその国の文化や歴史や^bシエウヅクといった目に見えない背景を背負っています。だから、たとえば「民主政治」といった言葉を使つても、それが内包する意味は日本やアメリカや欧州や中国やアラブではまったく違うのです。

欧米で「民主政治」といえば、ギリシヤやローマの都市国家から始まって近代の市民革命等の歴史的^cケイイを前提にした政治体制を想定しますが、日本にはそういうものはないのです。だから、政治改革をやつたにもかかわらず民主党が失敗するのはなぜか、などということを、まして英語で説明するのはたいへんに難しい話なのです。これは、日本の社会的、文化的風土がわかつていないと理解しがたいことなのです。

ところが、「民主政治」という共通語を使つて、文化や歴史の相違を無視した議論をやつてしまうと、いかにも共通の了解ができてしまうような錯覚に陥る。こうして、ほとんど気づかないうちに、^Bあの「本場」への隷従がいつそう深刻になってしまうのです。「自然」という言葉にせよ、「自由」や「コミュニティ」や「社会」にせよ、あるいは「神」や「絶対者」にせよ同じことで、これらはそれぞれの国の文化的、歴史的背景から切り離すことができません。しかもこれらは基本的に欧米の文化風土のなかで作り出された言葉なのです。その結果、どうしても、欧米主導の構造のなかへわれわれは投げ込まれてしまう。そういう状況が明治以降、えんえんと続いているのです。

だから、たとえば国際シンポジウムを開催して、本当に国際化が進展し、相互理解が進み、われわれの知識が深化するなど簡単に思うわけにはいきません。ましてや国境を越えた知の共同体ができるなどと楽観するわけにはいきません。ところが、ともすれば、今日の大学改革はそのような幻想を振りまいてしまうのです。

こうなると、私には西洋思想のもとになつたあの「広場」に対して、^c西田の「道」の方が気になってきます。「開かれたシンポジウム」などよりも、一人で自己の経験をもとにして、己の内にある深淵を^d覗き込むことで、その底に普遍的なものを見出^eそうとした西田の思索です。私には、そ

のことの方がはるかに意味深いことだと思われるのです。

甲

もちろん西田は西洋発の書物を驚くほど読んでいます。主要な哲学書はもちろん、彼の読書は、古典から聖書、漢書、文学、詩などたいへん広範に及ぶものでした。しかし面白いことに、西田自身は、本は好きだけれども、本当に読んだものはごくわずかだと述べています。全集などというものはもったこともなく、一人の人物を丹念に研究しようなどという気はありませんでした。「ただ一つの思想を知るということは、思想というものを知らないというに同じ」とさえいうのです（『読書』）。

要するに、西田にとっては、学問的研究はほとんど関心の対象ではなく、自らの日常の経験から発して、最後にまたそこへ戻ってくるための手立てを哲学に求めたのです。「日常性の世界というものが、最も直接的な具体的な世界である」という西田にとっては、哲学とは、この日常世界の意義をもっとも深く表してくれるものでした。だから「哲学は最も深い常識でなければならない」というのです（『理想』編輯者への手紙）。

私が西田哲学に関心をもち、^D西田幾多郎という人物に共鳴するのは、知識というものに対するこのような至極まつとうな態度が根底にあるからなのです。哲学を特権化するわけでもなく、学問研究にはさして関心もなく、しかし、日常の経験を突き詰めてその究極にある普遍的なものを取り出したいという姿勢に共感するのです。知識は、ア。

とすれば、われわれ日本に暮らす者は、日本という文脈を離れて知識にかかわることはできないでしょう。西洋の知識の輸入商人になり、それをⅡにして我がもの顔で論じ、何々の専門家と称し、海外からの著名な学者を招くことに精をだし、それで日本の学術水準が上がったのだと思ってしまう今日の風潮とはまったく異なった精神^Eがそこにはあります。

そういえば京都帝大へ赴任してきてすぐの書簡で西田は次のように書いています。

「大学の先生というようなものは真に人生を知ったものかどうか疑われて仕方がない。涙を以てパンを食うたことのない人の人生観はいかほど価値のあるものであろうか」（明治43年10月30日、田部隆次あて）

もちろん、ここに逆に、西田の驕りのようなものを見ることも可能かもしれません。しかしどうも京都は西田にとって本当に居心地のよい場所だったとは私には思えません。実際、京大時代の十数年は、子供の死、奥さんの病氣と死と、苦難の連続でした。京大を退職したすぐの書簡に次のようにあります。「外面には花やかに見えただものの、この十年来家庭の不幸には幾度か堪え難い思いに沈みました。花やかな外面も深い暗い人生の流れの上に渦巻く虚幻の泡にすぎませぬ。いろいろの仕事も自己を慰める手段であったかもしれませぬ」（昭和3年9月20日、堀維孝あて）。西田は退職してすぐに鎌倉へ居を替えます。

京都が西田にとってどのような場所であったのかはよくわかりませんが、それでも、^F西田のような哲学は京都からしか生まれなかったことは間違いありません。決して東京では生まれなかったでしょう。もともと、京都大学は、近代日本の国家建設の宿命を背負って生まれた東京大学とはまったく異なった意義をもっていました。それは東大に次ぐ大学なのではなく、東大とは違った大学

だったのです。東大が西洋の最先端の学問や技術の導入と日本の近代化という使命と不可分なのに
対して、京大は、特に文系の場合、内藤湖南に見られるように、東洋を向き、もつといえは西洋と
東洋を等分に見るというポジションを与えられていたのです。そこへもつてきて、京都という土地
柄、日本の伝統的なもの、歴史的なものへの関心が底に流れていたことは疑い得ないでしょう。

それは、最新情報を追うのに多忙で、競争と刺激によって成果を出し続けることを求められる東
京とはまったく異なった風土にあったのです。近代がもたらす最先端の情報や目先の問題から距離
を置くことこそが京都の特質だったはずですが、それを放棄すれば、京都は京都でなくなります。京
大が第二の東大を目指した時点ですでに京大は崩壊します。東大は常に西洋的なものの最先端を追
い、グローバルな世界を見ているし、またそうでなければ困るのです。だからこそ京大は、それか
ら距離をとらなければならないのです。業績主義、成果主義、商業主義はもともと京大には合わな
いのです。

西田が京大へ赴任してきたとき、彼はほぼ無名で、ほとんど業績もありませんでした。有名な
『善の研究』を出すのは京大赴任の翌年でした。誰かがこの無名の40歳の新人をスライキョしたので
しょう。

ところで西田の写真というと、いかめしい顔で肘を突きながら机に向かう写真がよくでてきて、
いかにも人付き合いの悪い気難しい哲学者らしい雰囲気をかもしだしています。確かに気難しい面
はあったのでしょう。しかし、西田は決して人付き合いの悪い孤独愛好家ではありません。

それどころか、ほぼ連日のように人と会い、弟子たちとそれぞれ「対話」をしていました。気が
乗らないとまったく何もしゃべらないくせに、哲学談義でも気が乗ると、えんえんと話し続けたと
弟子の一人高坂正顕もジュツカイしています。

一度、友人の山本良吉と対談しているテープを聞いたことがあります。西田の話し方は、たい
へんにはつきりとして分かりやすく、気坦と誠実さを感じさせる物言いなのです。決して独善的で
もなければ、ボソボソと難しいことをつぶやく、といった種類の口調でもありません。メールなど
というものがない時代ですから、他人と連絡を取るには手紙しかなかった時代です。それにしても
西田は筆まめでした。友人は当然、ずいぶん弟子たちに手紙を出し、さまざまなことを案じていま
す。日常的に彼らが出会って「対話」する。また一人で「散歩」する。京都はそれを可能とする場
所だったのです。

(佐伯 啓思「西田幾多郎 無私の思想と日本人」)

問 1 傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a テイサイ

b シュウゾク

c ケイイ

d スイキヨ

e ジュツカイ

問 2 空欄 ・ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は ・ 。

① 奴隷 ② 本流 ③ 真実 ④ 科学
⑤ 自前 ⑥ 主人 ⑦ 一流

① 大義名分 ② 有名無実 ③ 杓子定規 ④ 原理原則
⑤ 普遍真理 ⑥ 草壳特許 ⑦ 真美一路

問 3 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① われわれの哲学を日常的な世界の束縛から解放していくのです
- ② われわれの具体的な日常の生から離れることはできないのです
- ③ われわれの日常経験に実体を与える根源的な認識道具なのです
- ④ われわれの常識をもっとも深く表現する卓越した手段なのです
- ⑤ われわれの知的関心を刺激し、育んでいく大切な土台なのです
- ⑥ われわれの生活に彩りを付与する大切な糧に他ならないのです

問4 傍線部A「『本場』のふんどしで相撲をとらせてもらっている」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 西洋理論を超越する日本独自の学問形成を目指して奮闘する
- ② 西洋から導入された学問を日本の古い流儀に則って説明する
- ③ 欧米で展開された学問をそのまま受容しながら議論していく
- ④ 日本古来の学問を欧米からの学問と同じ土俵で闘わせていく
- ⑤ 西洋由来の学問を日本精神により日本的な学問に転換させる
- ⑥ 西洋に追いつくことを目指して、日本の学問を鍛錬していく

問5 傍線部B「あの『本場』への隸従」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 欧米の学者を無批判的にあがめ奉る態度をとってしまうこと
- ② 欧米の理論に心酔し、自ら表現の自由を否定してしまうこと
- ③ 国際的な学会において欧米の学者の軍門に降ってしまうこと
- ④ 日常の用語までもが欧米の学術用語に束縛されてしまうこと
- ⑤ 欧米学界の学問的圧力の下で日本独自の学問を展開すること
- ⑥ 欧米の理論に権威を認める学問的姿勢から抜け出せないこと

問6 傍線部C「西田の『道』」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 学問的研究を貫徹し、人間の経験の底にある普遍的なものを見出そうとした西田の情熱
- ② 京都大学在職中に数多くの苦難に見舞われた哲学者・西田が好んで散策を重ねていた道
- ③ 西洋の哲学書を徹底的に読みこなすことで『善の研究』を世に出した西田の学問的態度
- ④ 西洋思想を超える日本思想の構築を目指し、己の内にある深淵を覗き込んだ西田の思索
- ⑤ 自らの日常の経験を突き詰めることで普遍的なものを見出そうとする西田の平生の姿勢
- ⑥ 西洋思想や日本思想にとらわれずに、自らの信念だけを貫き通そうとした西田の生き様

問7 傍線部D「西田幾多郎という人物に共鳴する」の理由として最も適当なものを、次の①～

⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① 西田が学問的研究に全く関心を示さず、当時の学者にありがちであった独善的な態度をとらなかったから。
- ② 西田が西洋発の広範に及ぶ書物を多数読みながら、西洋思想よりもむしろ日本思想に価値を見出したから。
- ③ 西田が日常的に自己の経験を突き詰め、自分に向かい合いながら思索を深めていく態度をとったから。
- ④ 西田がただ一つ思想を知ることでは満足せずに、ありとあらゆる哲学者の思想を知ろうとしたから。
- ⑤ 西田が西洋の特権階級の学問から哲学を解放し、自己の経験に基づく学問として日本の哲学を構築したから。
- ⑥ 西田が欧米からの輸入学問として始まった日本の哲学を、自らの思索によつてまっとうな哲学に作り変えたから。

問8 傍線部E「そこ」が指し示す内容として最も適当なものを次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 31。

- ① 西田哲学
- ② 西田幾多郎という人物への共鳴
- ③ 日常の経験
- ④ 日本
- ⑤ 日本という文脈
- ⑥ 西洋の知識の輸入

問9 傍線部F「西田のような哲学は京都からしか生まれなかった」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

32

 。

- ① 妻子の死といった苦難に連続的に見舞われた西田にとって、最先端の学問の導入を国家的使命として担う東大の研究環境は重苦しく、寺社仏閣が多く日本の伝統への理解が深い京都の地しか癒やしの場にはならなかったから。
- ② 「開かれたシンポジウム」などよりも己の内にある深淵を覗き込む思索の方を重視する西田哲学は最先端の学問になる資質を欠いており、東大に次ぐポジションである京大でしか発展の余地がなかったから。
- ③ 西田は京都の地以外に友人や弟子を持つておらず、そのほとんどが京大近辺に居住していたため、西田にとって日常的に哲学談義に花を咲かせ、「対話」を行う絶好の場所は京都以外には考えられなかったから。
- ④ 日常の経験を突き詰め、日本という文脈に沿って展開する西田哲学は、西洋と東洋の学問を等分に見て、日本の伝統的なものや歴史的なものへの関心を底流に持つ京大の風土に根ざすものであったから。
- ⑤ 常に西洋的なものの最先端を追い、グローバルな世界を見ている東大は西田にとってはただただ仰ぎ見る存在でしかなく、劣等感を抱かずに伸び伸びと哲学的な思索に耽^びる場所は成果主義とは無関係の京大にしかなかったから。
- ⑥ 西洋の多くの書物に目を通し学問的研究を重視した西田にとって哲学は最も深い常識でなければならず、天才肌が多い東大よりも日本の伝統を重んじる常識人が多い京大の学風の方が西田に合っていたから。

問10 傍線部G「そうでなければ困る」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 東大よりも研究業績を上げている大学は国内にないため、西洋の最先端の学問や技術を導入する役割は東大のみが担うことになるから。
- ② 東大は様々な出身地の者が集まる東京に立地するため、学問的に他大学の手本になるべき期待を背負っているから。
- ③ 東大は日本の首都東京に所在するため、国内だけでなく海外からも大きな注目を受ける立場にあるから。
- ④ 東大はその創設以来、業績主義、成果主義、商業主義をモットーとしたため、常に最新情報を追い、国際的な競争に勝ち残る必要があるから。
- ⑤ 東大は近代日本の国家建設の宿命を背負って生まれており、西洋の最先端の学問や技術を導入することがその使命とされているから。
- ⑥ 東大は日本の伝統的なものや歴史的なものとはゆかりの薄い東京にあるため、最先端の問題や目先の問題に取り組む必要があるから。

問11 空欄 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑦のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 西田にとっての学問的研究
- ② 西田幾多郎という人物への共感
- ③ 苦難の連続であった京大時代
- ④ 東京から見た京都の土地柄と特質
- ⑤ 孤独愛好家ではなかった西田
- ⑥ 日常世界の意義を表してくれるもの
- ⑦ 京都だからこそ生まれた

問12 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は ・ 。

- ① 欧米から著名な学者を招いて行い国際シンポジウムの問題は、日本の学者が欧米の学問に対して無批判に権威を認め、あたかも奴隷が主人に仕えるかの如く欧米の学者にかしずいている点にある。
- ② 西田幾多郎が欧米の哲学書を学問的に研究することよりもむしろ日常の経験を重んじて、自分自身に向かい合い、己の内にある深淵の底から普遍的なものを見出そうとした思索の態度はきわめてまっとうなものである。
- ③ 西洋の最先端の学問や技術の導入と日本の近代化という使命を担っていた東大の学者に対して、京大の学者は研究業績や教育実績を問われることもなく、いつも自由に好きな学問を研究できる環境が用意されていた。
- ④ 西田は決して人付き合いの悪い孤独愛好家ではなく、自らの思索を日常的体験に基づいて深めていくことよりも、どちらかといえば弟子たちとの「対話」を通して哲学談義を深めていくことの方を重んじていた。
- ⑤ 日本に暮らす者は、日本という文脈を離れて知識にかかわることはできないため、欧米で展開した哲学を理解することは根本的に不可能であり、西洋の哲学書を離れ、日常の経験を突き詰めていく姿勢を貫くべきである。
- ⑥ 日本の哲学・政治学・経済学・社会学は欧米からの輸入学問であり、欧米の最先端の理論を後追いつことに終始してきたため、これらの分野においては日本の学者による世界的な研究業績は今日まで全く出ていない。
- ⑦ 学問的研究に強い関心を抱いていた西田は西洋の主要な哲学書のみならず古典から聖書、漢書、文学、詩なども読んだくらいの本好きであったが、彼自身は本当に読んだものはごくわずかだと述べている。
- ⑧ 欧米の著名な学者を招待して日本の大学が国際的なシンポジウムを開催したとしても、議論の対象となる自国の社会的・文化的風土に対する理解を欠いている場合は、その大学の国際化や知識の深化が必ずしも進むわけではない。
- ⑨ 家族の不幸に幾度も直面することになった西田にとって京大時代の十数年は苦難の連続とも呼ぶべきものであったため、膨大な西洋の書物に目を通すことで西田は『善の研究』をはじめとする哲学書を世に送り、自らを慰めていた。